

未知で等しい分散を持つ p 個の非負な正規母平均の同時推定

目白大学 張 元宗, 慶應義塾大学 篠崎 信雄, Rutgers 大学 William E. Strawderman

1. はじめに X_1, \dots, X_p を互いに独立に正規分布 $N(\theta_i, \sigma^2), i = 1, \dots, p$ にしたがう確率変数とし、 $\theta_i \geq 0$ とする。等分散 σ^2 が未知で、標準化 2 乗誤差損失関数を基準としたとき、母平均 $\boldsymbol{\theta} = (\theta_1, \dots, \theta_p)'$ の同時推定問題を考える。

分散が既知で、1次元の場合、Katz(1961) は θ の事前分布を非負な区間の上の一様分布とするとき、 θ の一般化 Bayes 推定量

$$\delta(X) = X + \sigma\psi(X/\sigma) \quad (1.1)$$

を提案し、 $\delta(X)$ は θ のミニマックス推定量であり、許容的な推定量でもあることを示した。ここで、 $\psi(x) = e^{-x^2/2} / \int_{-\infty}^x e^{-t^2/2} dt$, $\psi(0) = \sqrt{2/\pi}$ である。 p 次元の場合に対しても $\boldsymbol{\delta}(\mathbf{X}) = (\delta(X_1), \dots, \delta(X_p))$ は $\boldsymbol{\theta}$ の一般化 Bayes 推定量である。しかし、 $\boldsymbol{\theta}$ を同時推定するとき、標準化 2 乗誤差損失関数の下で、張 (1982) は $\boldsymbol{\delta}(\mathbf{X})$ を改良する縮小推定量

$$\delta_i^c(\mathbf{X}) = \left(1 - \frac{c\sigma^2}{\|\boldsymbol{\delta}(\mathbf{X})\|^2}\right) \delta(X_i) \quad (1.2)$$

を提案し、 $\boldsymbol{\delta}^c(\mathbf{X}) = (\delta_1^c(\mathbf{X}), \dots, \delta_p^c(\mathbf{X}))$ は $\boldsymbol{\delta}(\mathbf{X})$ よりよくなるための十分条件 $p \geq 3, 0 \leq c \leq 2(p-2)$ を与えた。ここで $\|\boldsymbol{\delta}(\mathbf{X})\|^2 = \sum_{i=1}^p \delta^2(X_i)$ である。

本研究の目的は分散 σ^2 が未知の場合、分散が既知の場合の推定量 (1.1) に分散の推定量を代入して得られる推定量

$$\delta(X_i, S) = X_i + a\sqrt{S}\psi(X_i/(a\sqrt{S}))$$

に基づく縮小推定量

$$\delta_i^c(\mathbf{X}, S) = \left(1 - \frac{cS}{\|\boldsymbol{\delta}(\mathbf{X}, S)\|^2}\right) \delta(X_i, S), \quad (1.3)$$

を提案し、 $\delta(X_i, S), i = 1, \dots, p$ を改良するための十分条件を与える。ここで、 $S \sim \sigma^2 \chi_n^2$ は X_i と互いに独立とする。さらに、 $\delta_i^c(\mathbf{X}, S)$ を含む 2 つの Baranchik タイプ縮小推定量のクラスを提案する。

2. 結果

定理 1. 標準化 2 乗誤差損失のもとで、 $\boldsymbol{\delta}^c(\mathbf{X}, S)$ が $\boldsymbol{\delta}(\mathbf{X}, S)$ を改良するための十分条件は

$$p \geq 3, 0 < c < 2\frac{p-2}{n+2}, a^2 \geq \frac{1}{n-4}, n \geq 5.$$

上の結果を下記のような 2 つの Baranchik タイプ推定量のクラスに拡張する。

タイプ 1 : $F = \|\boldsymbol{\delta}(\mathbf{X}, S)\|^2/S = a^2 \sum_{i=1}^p \left(\frac{X_i}{a\sqrt{S}} + \psi\left(\frac{X_i}{a\sqrt{S}}\right)\right)^2$ とし、

$$\delta_i^B(\mathbf{X}, S) = \left(1 - \frac{r(F/S)}{F}\right) \delta(X_i, S)$$

とする。次の定理が得られる。

定理 2. $\delta_i^B(\mathbf{X}, S)$ が $\delta(X_i, S)$ を改良するための十分条件は下記のようなものである。

- i) $r(F/S)$ は F/S の単調非減少関数
- ii) $r(F/S)/(F/S)$ は F/S の単調非増加関数
- iii) $0 \leq r(F/S) \leq 2\frac{p-2}{n+2}, a^2 \geq 1/(n-4), n \geq 5.$

標本の大きさに対する条件を改良するため、次のようなクラスの推定量を提案する。

タイプ 2 : $\tilde{F} = a^2 \sum_{i=1}^p \max\left\{\frac{X_i}{a\sqrt{S}} + \psi\left(\frac{X_i}{a\sqrt{S}}\right), \sqrt{2/\pi}\right\}^2 \geq F$ を定義し、

$$\delta_i^{B\tilde{F}}(\mathbf{X}, S) = \left(1 - \frac{r(\tilde{F})}{\tilde{F}}\right) \delta(X_i, S)$$

とする。次の定理が得られる。

定理 3. $\delta_i^{B\tilde{F}}(\mathbf{X}, S)$ が $\delta(X_i, S)$ を改良するための十分条件は下記のようなものである。

- i') $r(\tilde{F})$ は \tilde{F} の単調非減少関数
- ii') $r(\tilde{F})/\tilde{F}$ は \tilde{F} の単調非増加関数
- iii') $0 \leq r(\tilde{F}) \leq 2\frac{p-2}{n+2}, a^2 \geq 1/(n-2), n \geq 3.$